

---

# Paraとらべら～

呉璽立児

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Paraとらべらる

### 【Nコード】

N0747Y

### 【作者名】

呉璽立児

### 【あらすじ】

ある日、伊集院いじゅういん直なおは事故に会う。目が覚めると少年は自分の意思を持ったまま墓地の下にいた。必死に土を掘り起こして外に出るとそこには見たこともない両親の姿があった。両親は自分のことをナオと呼ぶ。

転生でも憑依でもなく、既に死んだパラレルワールドの自分と成り代わる物語。トラベルした先は、ファンタジーの世界。

直……いや、ナオはどちらの世界で生きることを選ぶのか？

## さよならはとっせんに（前書き）

毎日書いていた「セセファイルで3KB」縛りの小説です。

自分の変態性と欲望をブチまけた小説となりますが、よろしければ「[閲覧下さい](#)」。

## さよならはとつぜんに

終わらせることに恐怖したことはありませんか？

例えば、待ちに待った新作ゲーム。プレイしている最中はすごく楽しいのに何故かラスボス手前でセーブしたつきり止めてしまったことはありませんか？

例えば、学校の卒業式。当日になって倦怠感を覚えたことはどうですか？ でも、いざ終わってみると大したこと無かったでしょう？

人間には自ら終わらせることが出来るもの、と時が来れば勝手に終わってしまうものがあります。それを忘れないで下さい。

大雨でも小雨でもない、雨が深深と降る。

そんな中、黒い傘を差し、喪服に身を包んだ少年が菊の花束を手を持っていく。

伊集院直いじゅういん なおそれが彼の名前だ。

彼の両親は13年前今日と同じ日に交通事故で亡くなった。それは、直が僅か4歳の時の出来事だった。

男子というのは、幼少の頃はどうしても弱いものである。

当時、直は気管支ぜんそくをこじらせ病院に入院していた。

そして苦しくも同じ日彼は、生死を彷徨っていた。

夢を見ていた。三途の川などではなく、銀とも白とも言える同い年ぐらいの少女が両親に看取られながら逝く夢だ。それはまるで今の直自身を投影しているようにも見えた。

だが、実際は逝ったのは彼でなく、自分自身の両親であった。

黄泉の淵から目が覚めて最初に見たものは、喪服姿出泣きじゃくる吾川……おじさんの顔であった。

両親は知り合いである吾川家の運転手が運転する車と正面衝突を引き起こし他界したと聞いた。

吾川家は旧華族であった。両親の遺品と慰謝料を加えれば年齢さえ伴えば一人立ち出来る資産が直の元に転がり込んだ。だが吾川の謝罪はそれだけで終わらず直を引き取り育てるだけでなく、高校に入ると同時にマンションを買い与えた。直は両親の遺産を使わずして17歳という年齢を迎えることが出来た。

直の性格は、一言で言えば負けず嫌いであった。

子どもの頃サッカーの少年団に入ってたことがある。

その性格と人並みの努力があつてレギュラーの座を得る……直前に止めた。

当時、直は吾川と同級生にこう言った。

「どうして、やめちゃうの？」

「なんか、こわいんだ。こうやって、さいた花も、成虫になった虫もみんなしんじやうだろ」

正直、直自身にも分からない恐怖であった。

「でもね、また来年がくれば、お花も蝶もこうやって元どつりになるよ」

そういった、彼女の笑顔が忘れられない。

だから直は、途中で何かを止めてしまつてもまた新しいことを始める。そういう姿勢を続けている。

良く言えば、八方美人。悪く言えば器用貧乏であった。

そんな過去の出来事を思い出しながら、直は墓地を目指して歩く。だがそんなときであった。後ろから車のエンジン音が聞こえたと思い振り返ると、車のフロントガラスが目前まで迫っていた。

直は強い衝撃と共に跳ね飛ばされた。

## ようこそ、ナイドへ

ナイデール帝国　皇帝アレクサンドル・ナイデール？世が  
実行支配する、中堅国がある。

帝都から馬で5日ほどにホクオーというデューイーンの姓を持つ貴族が所有する地域は広大な平野で農耕が栄えそれに比例するよう  
に商業も栄えていた。

そこにある神殿が管轄する広大な墓所がある。ナイデール帝国  
で死者は貴族、平民問わず神殿がその敷地内の墓所に埋葬される。

話は変わるが、この世界　太陽と月という意味を持つ”ナイド”  
という世界では生き物は生まれた瞬間に誕生石というものを授かる。  
人の誕生石は才能を現すという。例えば宝石の誕生石を持つものは魔法に  
長けている。鉄を持つものは鍛冶師や騎士に長けている。といった天分を  
表しているそうだ。

また、己の進むべき道を決めたものはそれを生涯身につける為に武器に  
したり装飾品に加工したりし、死んだときには遺体と共に葬る。

そこで話は元に戻る。つまり、墓所とは、ならず者が狙うには絶対  
好の場所なのである。

もちろん神殿は、墓所にガーディアンと呼ばれる鉄人形を番人として配置  
しているのであるが。それを恐れない命知らずはいくらでもいる。

「ようやく、ここまで辿り着いたぜ」

盗賊が墓所にある森を眺める。

墓所にある異質な森。元々は平野だったここは13年ほど前にとある貴族の  
姫が埋葬されてから森になったのだという。その姫は、見たことも無いほどの  
大きさの宝石を所持していたとそんな情報を

得て盗賊はいくつもの死地を乗り越えてようやくここまでやってきた。

ナイドには亡霊やアンデットといった類の死者が魔物となる概念はない。だから、こういった悪質な類は後を絶たない。

盗賊が森にある開けた広場に辿り着く。中央には墓石のようなものが佇んでいる。元からこうなのか整備されているのか……まあ、盗賊にとってはどうでも良いことだ。

「まあ、悪く思わないよ。ただ、埋めておくよりは有効活用してやるからな」

盗賊は、遊び半分に手を合わせ死者に祈りを捧げる。  
背に背負っている麻袋を下ろす。

それには彼の仕事道具がしまいこまれていた。墓荒しを生業とする彼の仕事道具はもっぱらスコップとツルハシである。

「貴族の墓にしては質素だな」

盗賊は墓を見てそう思う。貴族となると墓荒しを予見して強固に固めたりするものだ。だが目の前の墓はただ墓石が置いてあるだけの質素な物だ。

「まあ、仕事が楽で良いがな」

疑問を捨てスコップを手に持った瞬間であった。

周りを樹木に覆われ耕された柔らかかそうな土から、

「うん？」

足に違和感を得た。

ちらりと足元を見ると、

土から一本の

ぬらりと手が生えて

盗賊の右足を握り締めていた……。

「ぎゃああああー!!」

それに仰天した盗賊は一目散に逃げ出した。



なんで、どうして、土の下!?

(暗い、ここはどこだろう?)

鼻を突くのは土と木の匂い。

強い衝撃に会った後、直が気がついた後真っ先に感じたのはそれだった。

手で周りに探りを入れてみるとまるで木の根が自分を包み込むように土の中に空間を作り上げているようだった。

(ちょっと待て……土の中?)

どうしてそのような場所にいるのかは皆目見当も付かないが、現状の自分の有様を理解するとパニックになる。

(土の中って空気は!?)

実際は酸欠は起こらないのであるが、頭が一度そう思い込んでしまったら、息が苦しいと錯覚する。

突如頭の上に、土がパラパラと落ちてくる。

もう、それで頭は真っ白になる。このまま土砂が上から落ちてきたら、と思うと気が気でない。

本来であれば逆効果だろう。だが直は上に向かって手で掘り進める。土は意外と柔らかく、非力な小さな手でも、容易に掘り進めることが出来た。

右手がようやく地上に飛び出る。

直は一生懸命掴めそうなものを探す。

そして、手探りでようやく一本の棒を掴んだ。それは生暖かく硬

いよつで柔らかかった。

「ぎゃああああ!!」

そんな悲鳴と共に手が振り払われる。

咄嗟に掴んだソレは人間の足だったようだ。

(待つて、助けて!)

そう声を出す前にその人間は逃げてしまったようだ。

(そんな!?)

直の中では今自分は命の危機に晒されているのだ。遭遇した人間に逃げられて落胆するが、黙っている訳にもいかない。

自分一人でも脱出しないと、そう決めた。

直は何とか土の中から出ようと木の根に足を掛ける。

外に出た右手で何とか体が通れそうなほどの穴をまるでモグラの様に開ける。

直の体感で2メートルほどある穴からようやく顔が出る。後はまるで足場にしてくださいと言わんばかりの木の根に足を掛けて下半身を土の中から出す。

(眩しい……)

土の中でもがいてまっ茶色になった体が地上に現れる。暗闇から太陽の下に晒されたことにより目がチカチカする。

(すぐく空気が澄んでる)

疲労困憊した体を周りを木に囲まれた広場の草原で仰向けにする。深呼吸をすると俗に言う”空気が旨い”というのが良く分かる。

(それにしてもここどこだろう……)

小さな体を横たえながら、直は自分の置かれたこの環境に疑問を投げかけた。

吹き抜ける風が直の頬を撫でる。

直が顔を横にすると小さな手が見える。ふと疑問を抱き上半身を起こすと頭が重い。

風が再び頬を撫でる。

”おめでとつ”

何かがそう祝福したように思えた。  
風にフワリと髪が舞った。

## 端から見ると生き返り

40代の夫婦が墓所を歩いている。  
妻はその手に花束を抱え夫に寄り添う。

(親より先に死ぬのは親不孝者だ)

ブオド・ラウ・デューイーンは、14年前に亡くなった自分の娘を思い出しそう感じた。だが、彼女が亡くなってから不思議な事が様々起った。

本来、娘の死で落胆し、出かけなかったことで自分達が乗る予定であった馬車が落石事故を起こしたが命拾いをした。

それから、彼女の埋葬が終わると、何故かホクオー地方は帝国内でも有数の豊満な土地になった。全て、彼女が引き起こした奇跡とでもいうのだろうか。

だが、ブオドはそんなことなくても良かった。

(ただ、お前に生きていて欲しかった)

彼女は余りにも生まれ持った力が強すぎた。成人並みの魂を持っていなければ、体に魂が付いていけず死に絶える、と生まれ持ったときから余命宣告をされていたのだ。その魔力は彼女が生まれたときに世界から与えられた誕生石からも見て取れた。生まれた赤子よりも大きい赤い宝石……異常であった。

「あなた、そんなに暗い顔してたらあの娘が悲しむわ」

ブオドの妻、リオがそう言う。

「ああ、そつだな」

彼女を埋葬したときに踏ん切りは付けた。それに今は新しい家族もいる。

一際目立つ、森が目に入る。

ブオド達が彼女を埋葬した後、しばらくして彼女の墓の周囲が変容したのだ。まるで彼女を守るように佇んでいる。

命日には、こうして家族で墓を訪れては近況を報告する。もう一人の家族はしばらくしてから訪れる予定だ。

「相変わらずここは神聖な空気がするわね」

リオは深呼吸する。

ここは神殿の敷地内にありながら最も神聖な気を感じさせる。

大気中がものすごい量のマナで溢れている。

マナはこの世の神秘を引き起こす根源だ。マナは人間がエーテルというものに変換することで魔法や呪術といった神秘に用いることが出来る。マナがどこから来るのかは誰にも分からない。ただ、神殿が過去からの慣わしで年に一回この世全てにマナを満たすという儀式を行うことで充滿するものらしい。

マナは宝石や鉱石といったものと相性が良く、内包しやすい。だから、質の良い誕生石を持つものは魔法と相性が良いことになる。

「いつも思うのがこれほどマナが充実していると、普通は魔物の一匹も出るものだろうにな」

この不思議な場所に疑問を抱く。マナは人間以上に動植物には相性がいい。人間はエーテルというものに変換しないと使えないが、動植物は違う。マナのまままで使うことが出来るのだ。誕生石を持つのは人間だけでなく力の強い誕生石を持つ生き物は、マナの力で巨

大化したり強大な力を身につけたりする。

夫妻が森の広場へと辿り着く。

そこで夫妻な目を大きく開かせた。

まずは墓の近くに人が一人通れるほどの穴が開いているというこ  
と。

そして、

今はいないはずの彼らの娘が、草原の上で体を土色に染めて横に  
なっているのだ。

「ナオ……」

これは夢か幻か。彼らの目は瞬く間に涙を滴らせた。

## 衝撃の新事実

「ナオ!!」

「ナーちゃん!!」

そう言って、直にしてみればまったく知らない人物が自分の体を抱きしめる。

いや知らない人等ではない。

直にとって見れば昔亡くした、欠けたピース……それがカチリとはまった気がする。

(父さん……母さん……)

「父様……母様」

髪の色といった姿形は一見、似ても似つかないはずなのに……いや、そうでもないと感じる。漂う雰囲気、そして見れば見るほど過去の自分が見た両親と重なる気がする。

ナオの頬を涙が伝う。

自分が昔亡くしたものが目の前にいる。願っても叶わないはずのその願いが叶った。

ナオは嗚咽を漏らす。

その声はまるで産声のようであった。

少し落ち着いた直は、自分の今置かれた状況を確認する。

何か違和感を感じるのだ。

まず、目で見える世界が広い。始めは周りの木が大きいのかと、思った。だが目の前の両親を見上げるとそうでないことが分かる。

そして、何故か頭が重い。帽子とかを被って上から押さえつけら

れて重いとは違う。下から頭皮を引っ張られる重たさでも言うのだろうか。正直、直には味わったことのない感覚だ。

落ち着いてみれば今の直は腑に落ちないことはいっぱいだ。頭皮を引っ張られる感覚が気になり足元を見る。

(え!?)

穴から這い出た所為だろう……手足が土まみれだ。だが、驚いたのはそれではない。直が今、身に着けている格好がおかしいのだ。

(女物!?)

土で汚れてはいるが、恐らく白かったのだろう足元まで延びるネグリジエともロングワンピースとも言える上品な服を直は着ていた。

「可哀想にこんなに汚れて……」

ブオドは軽々とナオを抱きかかえる。

(えええええ!!)

直は平均的な高校生の体格をしていたはずだ、それを軽々と持ち上げるこの父は何者?、と直の頭は混乱する。

「早く家に帰って、体を洗ってドレスに着替えましょ。ナオは可愛い女の子なんだから」

リオが意味の分からないことを言う。

「どっついでとっ?」



そつ口に出すといつもの自分の声が高いことを思い知る。

「ほら、貴女こんなに汚れてしまってるわ」

リオがシヨルダーバックから綺麗に裝飾されたコンパクトミラーを取り出す。

そこに映った今のナオを見て直は驚嘆する。

鏡に投影されたのは白とも銀とも言える長い髪をし、青い目をした年少の少女だった。土で汚れてはいるが、どこに出しても美少女と言われるそんな容姿をしている。

そして、顔を横に向けると、その鏡の中の少女も横を向いた。

（ど、どいうことだ!?!）

「ど、どいうこと!?!」

直が発した言葉は男言葉から勝手に少女の言葉に変換された。

あ、野生の魔物が飛び出してきた！！

(なんで！？ どうして？)

直は頭の中で苦悶する。

ナオはブオドに所謂お姫様だっこをされて運ばれている。

端から見ればなにもおかしくは無い光景だが、直からすれば不自然極まりない。

(こんな、漫画アイツに見せられたことがある気がする)

直と同じクラスに通う、オタクの知り合いがこういった「入れ替わり」や「女体化」といった本を見せてくれたが、その中の主人公達は次のコマでは既に慣れた生活を送っていたが……

(いやいや、無理無理無理！！)

しかも、直の身に起こったのはそれだけではない。体が小さくなっているという「幼児化」までおまけに付いているのだ。

だが、今すぐ戻りたい……とは思えない。

目の前にいる両親は確かに本物だ。体も心も、そして魂も目の前の夫妻が自分の両親だと確信してしまっている。

もし、元に戻れるとしても目の前にある二人を再び失うとしたら

……

とても、怖かった。

林道も中ほどと言うほどという所で異変は起きた。

ナオは未だにブオドに抱えられたままであった。  
違和感に気がついたのは抱えている張本人であった。

「リオ止まれ……」

「あなた？」

ブオドは貴族の男子である。幼少の頃から騎士の真似事ぐらい習い事でやってきた。今でも剣を振り続けている。

だからこそ、森の奥からの気配に気がついた。

ガサゴソと草木が揺れ始める。

ソレは隠れながらも顔をチラリと見せた。

「ウッドゴ布林か！」

ブオドが腰にかけていた、片手剣を抜く。幾度と無く彼の身を守り続けてきたその剣を……今は再びこの世に生を受けた彼の娘を守るために……強く、握り締める。

「キキキキキ」

ウッドゴ布林達が一斉に威嚇の声を上げる。

剣を抜くブオドに対して、直にはそれが危険な物だと感じることは出来なかった。

それは自分にだけ警戒が向けられていないからであった。

ウッドゴ布林達がしているのは、両親に対してだけである。

「ナオ、リオ下がっている……」

ブオドがナオを地面に下ろしてリオに託す。

「あなたに加護を……」 ナイ・ラー・デフ」

リオは首からかけた宝石の付いたペンダントを握り締めて”謳”魔法を使うための触媒と呼ばれるモノが、リオの誕生石とペンダントの装飾品のみという簡易的な物しかないので発動した魔法は簡単な物でしかない。だが、ブオドの身を包む加護はそれでも大きな落石を弾き返すほどの効果を持っている。

「……助かる」

ブオドは苦し紛れにそう呟く。次から次へと集まってくるウッドゴブリンの数は明らかに一人で倒せる量を超えている。

「はあああ!!」

そこにブオドでもリオでもナオでも、またもやウッドゴブリンでもない声が響いた。

「間に合ったみたいだね。パパ」

その人物は高く跳び上がって、ブオドの側で膝をついて着地する。

「シャルド!」

「シャル」

ブオドと比べるとスラリと背が高く、クセツ毛の金髪を持つ男がそこにいた。ただ、スマートでもひ弱なのではなく、逞しさすら感じる。

シャルドと呼ばれたその男は、細く鋭いレイピアを引き抜くとブオドの背後をカバーするように立った。

「事情は後で聞くとして、ママと姉様を守るよ」

「ふん、元よりそのつもり……お前の手など借りない」  
「年を考えなよ」

二人はそう軽口を叩いた。

空から、でっかい宝石が！？

ブオドとシャルドは、剣を握り直す。

人、魔物共に今にも飛び掛りそうな雰囲気であった。

「やめて！！」

その空気に水を注すように澄んだ声が響いた。

声の持ち主は、ナオの物であった。

直はウッドゴブリン達が自分に向ける慈愛に満ちた表情を感じ取っていた。

つまり彼らは自分を守ろうとしているのだと。

ナオの一言でウッドゴブリン達は怯む。そしてブオドとシャルドの二人も怪訝そうな顔でナオを見つめる。

「父様、彼らは私を守ろうとしてくれているだけなんです」

相変わらず、思っていたのとは違う口調が飛び出るが今は気にしてられない。

「貴方達も……彼らは私の大切な人達です。危害を加えないでさい」

魔物であるそのもの達に言葉が通じるか分からないが、ナオはそう語りかける。

すると緊張感のようなモノが引いていくのを感じる。

どうして魔物がナオを守るように現れたのかは分からないが、ウッドゴブリン達は分かってくれたようだ。

殺気が引いたことでブオドとシャルドは剣を収めようとする。

「あなた、待って!!」

そう言いとどめたのはリオだ。

リオだけではない、ナオも鳥肌に近い何かを感じ取る。

何処からと言われれば森全体と答えるだろう。

ナオと違い成熟した魔法使いであるリオは、強大なマナの存在を感じ取る。

「これは、魔物なんかじゃない……もつと大きな」

魔物とは、マナを体中に含む動物の総称だ。誕生石を授かるのは人間だけではない、強い誕生石を体に持つ獣はまた魔物となりうる。魔物はいくまで獣が変化した姿である。実態があれば気配もある。リオが感じ取ったのは、そういった直感的なモノではなく、魔的気配であった。

『往くのか?』

そう塩枯れた声が聞こえる。

墓地の森を形成する木々が、一斉に糸のように形を作り始める。

「まさか……木龍……」

木がまるで血管のように体を作るように這い回り形成した形は、まるで幻想上にのみ登場する龍のような存在であった。

幻想獣とは、魔物とは発生の根源がまた違う。

それが娘の墓地にいるとは、ここにいる家族全てが思いもしなかった。

ナオはウッドゴブリンと同じように木龍と呼ばれたソレから命の危険に繋がるような恐怖を感じなかった。だから率直に、

「はい」

と、頷いた。

肉体、精神、魂共に生きてるのであれば墓地に在る必要はないだろつ。

『ならば、これを返そう』

そういつて木龍は自身の体から赤く光る物体を浮かばせながらオへと渡す。

木龍が飛ばした光……それは巨大な紅色に光る宝石だった。指輪などに使われる宝石と同じような形をしている。

だが、目を見張るのはその大きさだ。直が驚いたのは、宝石が両手でギリギリ覆い隠せるか隠せないかといった大きさを持っていたからであった。そして更に印象深いのが、取り出すことは出来そうにないけど、この赤い宝石の中にもう一つ宝石が入れ子になっていると言っ点だ。

もし、この宝石を現実世界で売ったとしたら想像もつかないのだろつかと直は感じた。

『では、さらばだ』

木龍はそういつつと木で出来た羽を広げる。物理的にはまったく浮かばなそうな穴だらけの羽で巨龍は飛び立つ。隙間だらけの体には、ウッドゴブリンがぶら下がっている。

木龍はそのまま地平線の彼方へと飛び去った。



空から、でっかい宝石が!?(後書き)

ファンタジーの世界へと辿り着いたナオ。自分のおかれた状況をこれから確認していくこととなるでしょう。

ノルマ3KBの小説なのでぶつ切りになってしまつと思いますがこれからよろしく願います。

聞いてくれ、信じられないだろうが、オレは今、幻想やおとぎ話のような絢爛なファンタジーの世界に来ている。

直の頭にそんなどこかで聞いたようなキャッチフレーズが流れる。広大な敷地の中に建つ大きな豪邸の窓から深窓の令嬢よろしく、ナオエリユーシア・デューイーン　愛称ナオはため息を零す。墓地での一件のあとナオは、この豪邸に連れて来られた。まずは、風呂……というよりも旅館のような大浴場に連れて行かれリオと侍女に土まみれになった体と髪を隅々まで洗われた。その際、直としての自分が少女となっていることを再認識したのは言つまでもない。

(思い出したくない……)

男としての直からすれば、それはもう悪夢だった。自分の体だといつのにナオの白磁の裸体を見るだけで顔が上気してしまう。

その後は、何人もの医師が家に招かれ往診が何度も続いた。

結果、直は両親とまともに会話する機会も無く自分の置かれた環境を未だに理解出来ずにいる。

分かっているのは、ここが自分の常識では存在しない科学ではなく魔法と言う名の神秘がある場所だと言うことだ。

そして、鏡を見れば直とは似つかないナオエリユーシアという少女が今の自分自身であり、またナオと呼ばれていると言つことぐらいであった。

(あの二人も来ないしなあ……)

両親だと認識したブオドとリオの二人とは、あの日から二日までもに顔を合わせることが出来ずにいる。

(寂しい)

そう思う。

自分が今思っていることが直自身のモノなのか、それとも少女ナオエリユーシアのモノなのか分からない。

第一自分自身に何が起こったのかがさだかでないのだから。

(まずは情報収集しないとだな)

豪邸ということもあり書庫の一つもあるだろう。

ナオは意気揚々と立ち上がり、一人で書庫を目指ことにする。

ドアを開く一番、豪華な赤い絨毯が飛び込んでくる。

ここはそんな場所だ。

(この光景はいつ見ても慣れないなあ)

生粋の日本人である直からすれば、この西洋風の貴族邸のような光景は違和感しかない。

気持ちだけは場違いだと感じながらも、形は様になる少女が赤い花道の上を歩く。

ナオはベージュの踝まですっぽりと覆われているドレスを見に纏っていた。飾り気はあまりなく、唯一ある胸元のリボンの色もドレスと同じくベージュの物である

(歩き難っ!!)

少しでも大きく歩を踏み出そうものなら裾を踏みそうになる。自

然と小幅で足を擦らせる歩き方となる。それがまた大人しく見える様になっていた。

廊下は長い。窓から見たとおりここは二階である。

ナオの為に用意された部屋は日当たりが良く夕方になるまで日が入る部屋だった。

(だとしたら書庫は反対側か?)

常に日当たりが良いと言うことは、ナオの部屋は南側である。窓が無いという可能性もあるが書庫があるとしたら北側ではないかと思っただ。

小幅でゆっくりではあるが周りに対する警戒を怠らない。

ここには直の敵が存在する。

その名は侍女。

またの名をメイドという。

## ファイアー ザ・メイド

メイド……清掃、洗濯、炊事などの家事労働を行う、女性使用人のことである。(参考: [Wikipedia](#))

それは決して、喫茶店で働くバイトではないし、もちろん出会いがしらに冥土に送ってくるような殺し屋でもない。

本来なら決して恐れる必要の無い人物、それがメイドである。

ナオは廊下の角まで来ると、侵入者のように少しだけ顔を出し廊下を確認する。

直が彼女達を恐れるのには理由がある。

メイド達は皆そろってナオに対して過保護なのだった。

着替え、風呂、トイレ等全てに彼女らは付き添い世話を焼いてくる。気持ちだけは17歳でいる直からすればこれは脅威でしかない。目が覚めた時に両親がいる。これは喜ばしいことである。

自分の知らない家族……年上の弟がいる。まあ、家族が減るよりはいいだろう。

ここは、科学ではなく魔学が発達した世界である。家族が存在していることを考えたら、それもいい。

それでも家族より長く関わった、ある人物がいないのが気に掛かるが……。

だが、幾つのことを肯定しても、納得出来ないことが一つだけある。

(なんで、オレが小さい女の子なんだよ)

この一点に尽きる。

しかも、いちいち行動一つ一つを介助されていると、嫌でも実感せざるを得ない。

だから、ナオはメイドを警戒する。彼女らも主人の命令……いやそれだけでなくナオを大切だと思っからこそ彼女達は監視を怠らない。

二階をしばらく歩いてみると、目の前にフレンチドアがある。他の部屋が一枚のドアなのに対してこの部屋は二枚のドアになっている。

両手で力いっぱい押す。

湿度を招かないために密度の高い重たい木材で作られた扉はゆっくりと開く。そこは、書庫というよりも机があり書斎のようになっていた。

北側の部屋とはいえ昼ということもあり窓から光が入っている。少し薄暗くあるが文字が読めないことも無いかもしれない。

(よし、アタリだ)

ブオドが使っているのだろうか、机の上には黒のインクと羽ペンがある。そして所狭しと本棚が並べられている。

そして壁には、少女の絵が飾り付けてある。

絵は天使のような白いドレスを見につけたナオエリューシアのように見えた。

(まるで遺影写真のよう……)

ほのかに微笑む絵からは哀愁が漂う。

ナオエリューシアは、幼いが美形だ。これからも食生活だけ気をつければ将来は見事な美人になるだろう。まあそれが自分自身だというのが納得いかないのだが。

ナオはため息を一つきつつも、絵の近くの本を一冊手に取った。

「読めない……」

直からすると、見覚えの無い文字で書かれてあった。

「ナ……イド？」

だが、不思議と読める字と読めない字があった。

見たことが無い文字で書かれているはずなのに、何故か頭に言葉が浮かぶ。

ナオは首を傾げる。

その時、突然声をかけられた。

「そこにいるのは……姉様？」

## そのころの義弟

「さてどうしたものかな」

シャルド・デューイーンは、頭を悩ませていた。

シャルドはデューイーン家の長男で、エイリバー家から来た養子でもあった。

当時のシャルドは3歳であった。

デューイーン夫妻は娘を亡くしたばかりで深い悲しみの中にいた。そこへ家督継続の為に同じ年の従者候補の少女と一緒にやってきたのがシャルドだった。

彼は長い年月をかけてようやく家族の一人となった。

その矢先、彼の姉とも呼べる存在が生き返ったのだった。

この場合、彼女が第一子となる。4歳の姉と16歳の弟という奇妙な関係が成り立ってしまったのだ。

(なんか騒々しいな)

廊下で侍女達がバタバタと走り回っている。

「ミリイ」

シャルドは鈴を鳴らし専属のメイドを呼び出す。

「はい、シャルド様」

「何かあったのか？」

「どうやら、ナオエリユーシア様がお部屋からいなくなったそうです」



ミリイという名のシャルドと同年のメイドは、顔を顰めてそう言う。

「そんな顔するな。子どものすることだ」

「ですが!？」

「お前が心配することは何も無い」

ミリイは、シャルドとエイリバー家からやってきた存在で、シャルドが家督を継ぐことを切に願っていた。

「お前も姉様を探しに行け」

「……はい」

ミリイは不服そうにしながらもシャルドの部屋を後にする。

「さて、僕も探しに行くとするか」

考えることが沢山あるとはいえ、彼女は両親が大切にしている存在である。

彼女を任された身としては、このまま放置しておくことは出来なかった。

第一、彼女は今まだ公に出来る存在ではない。もし知られたとしたら、付けねらう存在が沸いてくるだろう。

生き返ったナオエリユーシアとはそういう存在なのであった。

(とはいっても、子どもの足なら行ける所は限られているだろう)

そう思い、シャルドはナオを探しに出た。

窓の外を見れば、この館のメイドの6人の内3人が外を探していた。

シャルドは二階の廊下を歩く。

(ん？ 父様の書齋とじのみまが開いてる？)

何時もは鍵が掛かっている書齋の扉がかすかに開いている。

シャルドがそこを見ると、そこにナオがいた。

彼女の遺影肖像画の前に、一冊の本を開いて佇むナオ。

何故かそれは幻想的に見え、息を呑んだ。

一呼吸置いて、シャルドは姉を呼ぶ。

「そこにいるのは、姉様？」

## 特異点

「ひゃ、は……い」

ナオは叱られた子犬のような奇妙な返事をした。

ドアの方を見ればそこにはスラツと背の高い青年がいた。立场上、ナオの弟となるシャルドであった。

「皆が心配していたよ」

シャルドはそう子どもに語りかけるようにそう言う。

(子ども扱いするな)

「子ども扱いしないで下さい」

ナオはフンと横を向く。

正直、直はこのシャルドという男に不信感を持っていた。

直の時には存在しなかった、そしてナオも知らない弟として存在する。それが、そっけない態度として現れた。

「どうして、こんな所に？」

「知りたいことがあったのです」

ナオはそうツンと答える。

「ふむ……」

シャルドはそう頭を捻る。

「なら、僕が出来る限り答えてあげよう」  
「え？」

そう言っつてシャルドはナオを抱き抱えた。

「とりあえず、部屋に戻ろう。このままじゃ、メイド達が寒空の下……風邪を引いてしまつかもしれない」

そう、彼は苦笑する。

「シャルド様ありがとうございます」

メイド達は一礼する。

ナオはその中で奇妙な視線を送ってくる者に気がつく。

(あの子?)

その中で一番若そうな、ブロンドの髪を2つに分けた者が見つめてくる……というよりも睨んでいる。

「もう、仕事に戻っていいよ」

そうシャルドがそう言っつと彼女らは下がっていった。

不思議そうな顔を浮かべてているナオにシャルドが言っつ。

「彼女のごとは気にしないでいいよ。後で言っつて聞かせておくから」  
「私のこと睨んでましたよね」

シャルドは含み笑いをする。

「それより聞きたいことがあるんじゃないのかい？ それは彼女のことかい？」

ナオはいいえ、と顔を横に振る。

「私がまず聞きたいのは、私の今の立場です」

ナオは率直にそう尋ねた。

(驚いた)

これは本当のことだった。

”生き返り”という現象が、この世においてまったくくない訳ではない。

ナイドの歴史においてこのようなもの達を復活者 リターンズと呼ぶが、そういった者達は、王になったり、勇者となったり、はたまた巨大な力を持つ魔王となったり、いずれも歴史に名を残してきた。

ここ2日前にいたるまでシャルドは、リターンズと言うものを名を上げるためのメツキの一つ程度にしかとらえていなかった。

シャルドは目の前の幼さいながらも聡明な眼つきをする義姉をただの子どもと捉えてはいけない……そう感じた。

「それは、一言では片づけられないね。一つずつ話していこうか」

ナオはコクリと頷く。

「姉様はまず特別な存在なんだ。これを自覚して欲しい。その特別というのも二つある。まず、一つは誕生石だ」

シャルドは自分の誕生石の埋め込んだ宝剣を取り出す。シャルドの誕生石はサファイアだ。宝石という時点でシャルドは魔法の才覚があり、鉄の因子を持つことで剣の才気もあるのだ。

「ちなみに姉様のは……」

ナオが木籠から返されたヘッド・サイズと言われる大きさの宝石  
アーマージュエルを手取る。

いつ見ても見事な物だと、シャルドは感じる。宝石が入れ子になっている事から内なる宝石を守っていることからこの名が付いたと言っ。

## 魔という名の神秘

シャルドは一般的な誕生石についてナオに教えてくれた。

「つまり、誕生石は持つ者の才を現しているんだ」

そこで話はナオ自身のモノに移る。

「で、姉様のアーマジュエルのことなんだけど。まあ、普通に考えて異常だよね……」

シャルドが言うには、これほどの宝石が見ることはまず無いのだという。もちろん、直だつて見たことが無い。

誕生石が持ち主の才覚を現すのならば、ナオの持つ魔法の資質は計り知れないのだと言う。

「その所為で早くに亡くなったんだけどね。内包するマナの余りの膨大さに姉様の魂が耐えられなく、眠るように逝ったらしいよ……」

ナオは自分の体を確認するも、特に異常は無い。

魔法と言う未知の才が自分にあると知り、ナオは興味が沸く。

「……ちょっと、姉様まさか魔法を使いたいなんて言わないよね？」  
「なんで？」

シャルドは安堵した顔をする。「なんで？」と言ったことで本人にその気は無いのだとシャルドは感じたんだろう。

だが、ナオはそうは思っていない。

「なんで、使っちゃダメなの？」

その一言でシャルドがギョッとする。

直は、なんでもやってみるのが好きだ。そんな直に才能があるのに捨て置けというのは無理な話だった。

「だから、姉様はその力の所為で一度死んだんだよ!？」

「でも、今は大丈夫よ。じゃあ、いいじゃない」

シャルドはうるたえている。

「ちょっと待って、せめてもう一つの特殊さを説明させてよ」

「……分かった」

本当ならば、今すぐに使ってみたかった。でも、質問を問うたのはナオの方だ。

シャルドは気持ちを落ち着けて、話を始める。

「つ、次はリターンズについてだね」

……

……

……

…

シャルドは、リターンズについて語った。シャルド自体リターンズという者について知っているのは伝説上の人物しかいないので大まかな説明しか出来ない。

「わかった？」



シャルドは不安そうにナオに顔を向ける。なぜなら、ナオが喜気とした表情をしているからである。

「つまり……アタイったらさいきよーネ？」

「まあ、間違っちゃあいないけど」

ナオは終わりの見えない新しい自分の進むべき道に希望を見いだしていた。

シャルドは頭を抱えた。

先ほどまでは年上のように見えていた彼女は、一変今度は童心に戻ってしまったている。

命の危険の話をきちんと聞いていたのかと問いたいほどだ。

「とりあえずだね、姉様!!」

「はい！」

これだけは言っておかなくちゃいけないことがある、とシャルドは声を上げる。

「父様達はね、君の為に今動いている。その思いを決して無駄にしないでほしい」

自分は目の前の少女がどうなるうといい。だが、いなくなれば深く悲しむ者がいるのだ。

彼らの深く悲しむ顔はもう見たくないと、シャルドはそう言い切るめた。



## お着替えタイム

ナオは部屋に一人ぼつんとベッドの上に腰かけている。自分に大きな魔法の才というものがあるのにも驚いたが、

姉様はいろいろと狙われているんだ。

それには、もつと驚いた。

自国だけでなく他国。そして自国内においても、皇族、教会、学園等様々な所から目を付けられる存在だとシャルドは言った。

両親はナオが危険な目に会わないように根回しをして回っているのだという。

ナオの空白の14年の間にアーマジユエルがホクオーを肥沃な大地へと変えたのが一つの要因だった。

死者は教会の管轄であり、ナオが死んでる間にホクオーの教会は強大な力を得たのだという。

(それでも、もう一回”死ね”と言われるよりはいいけど)

ナイドにおいてリターンズは尊い存在として認識されている。直の世界なら死者が歩いたなら、即 除霊 たおし てしまおうなんて考えがないのは一つの救いであった。

コンコン、と部屋がノックされ、ナオは一度考えを打ち切る。

「はい」

返事をする、メイドが一人入ってくる。

「お嬢様、ご就寝の時間でございます」

メイドの手には、寝巻が掛かっている。

出来れば、せめて上着とズボンに分かれたパジャマを所望したいものだが、そんなものは無い。

「それでは失礼いたします」

そう言ってメイドは、ナオの着ていたシンプルなドレスに手をかける。

「いや、自分で出来るよ」

そう言うてはみても、メイドは微笑を浮かべるのみで、あつという間にバナナのように剥かれてしまう。

淡雪のような実身だけになってしまったナオは顔を紅くする。

「さあ、こちらにお着替え下さい」

そういつてメイドは、直の便宜状としては”裾が長いだけで上着しかないパジャマ”と言い聞かせているモノを広げる。

自分の今の身は女の子なのは理解している。そして、昼間のような淡い色なら妥協も出来よう。

だが、今から着る……ようはネグリジェは、パステルカラーのピंकである。しかも、スカート部がフレア状、表はフリルになっている。

誰がどう見ても、女の子っぽいのである。

「申し訳ありません、お昼間のお召物といい、従者のお下がりです……。すでに、手配しておりますので」

直に対してその言葉は、ある意味絶望する。

(これで、メイドの服だっていうのか……)

もし、直が想像するような絵本にある、きらびやかなドレスを着たら……。思い描いただけで、顔が恥ずかしさで瞬間沸騰する。

「……では、お嬢様良い夢を。お休みなさいませ」

いつの間に終わっていたのかなオには分からないが気がつけば頭にフリルがまぶしいナイトキャップまで置かれていた。

目が覚めて、上見上げれば、ファンタジー

なーちゃん、なーちゃん、この服どうかな？

幼馴染の吾川 紅莉きりがブティックで服を選んでいる。

「あー似合ってる似合ってる」

直は適当に対応する。

正直、男である自分が女性の服など選べるはずも無い、自分自身の服でさえ紅莉に選んでもらっているのに、と直は思う。

もう、なーちゃんったら

紅莉は呆れる。

自分の服ぐらい、自分で選ばないと

そういって、紅莉は手に取ったドレスを直に押し付けてくる。

「おいおい、冗談は……」

そういった自分の声が不思議と何時もより高い。背がどんどんと縮む。気がつけば、頭は白い髪で覆われ、肌は白磁になっていた。

やっぱり、こういった可愛い服が似合っね……ナオエリユーシア

目が覚める。夢見は最悪だった。

「そんなことある訳無いじゃない」

大きなベツト、そして可愛らしい天蓋。

現実には夢よりも奇なり、目が覚めた直はもちろんナオエリユーシアのままだった。

「ハア……」

思わずため息が零れる。

(こうなったら、その魔法とやら……極めてやるつもりか)

元いた世界では出来ないことをマスターしてやるかと鼻息を上げる。

「おはようございます。お嬢様」

ナオが目覚めて間もないと言うのにメイドは既に着替えを持って待機している。ノック以外の物音を立てず気配も感じさせずに主人の行動をいち早く察する様は、なんなのだと思わずツッコミたくなる。

そう思いつつも、ナオは再び立っているだけで、ネグリジェ 裸体 ドレスへと一瞬で着替えさせられる。

(何も感じるな……無心になれ)

直は悟った、これが無一物の境地だと。

着替えが済んだナオは一階の食堂へと案内される。

ナオは昨日と同じデザインのエプロンドレスから前掛けを取ったような服を着ていた。相変わらず歩きにくく、小幅で遅い。だがメイドはナオの歩幅に自然と合わせてくれる。

「やあ、おはよう。姉様」

「おはようございます、シャルドさん」

「ふふ、そんなに堅苦しくならないで、姉弟じゃないか」

シャルドはテーブルの前で食事にも手を付けずナオを待っていてくれたようであった。

ナオは、ファリと呼ばれるパンの一種が置かれている空席の前に坐る。

ナオのファリはすでに細かく切り分けてあり、小顔のナオでも一口で食べられるようになっていた。

(どこまでパーフェクトなんだ……メイド)

従者に驚かぬなかれ、彼女らの気配りはどこまでも究極なのだ。

「では、頂きましょう」

「はい」

ナオとシャルドは、豊穣の神と農作物、酪農を営んできた人々に感謝の気持ちを心の中で述べる。

これが貴族としての心得であることは、ナオが覚えていた。人々より上に立つ者だからこそ作ってくれた者への感謝の気持ちを忘れない。

直にとっては知らない知識だが自分の国でいう”いただきます”となんら変わらない。

ナオにはこのようにこの世界の一部分の常識を持っていた。直と



しては知らないはずの知識のはずなのだが、不気味に思っても不便に感じることは無かった。

食事を終えたころ、ナオはメイドにナプキンで顔を拭かれていた。

「いいって」

そういうもメイドは、

「ふふふ、私の仕事を奪わないで下さいませ」

と、微笑み返して言うだけだ。

「ナオエリユーシア様、シャルド様。旦那様と奥様がお戻りになられました」

「ホント？」

ナオは、ぱつと笑顔になる。

「じゃあ、迎えに行こうか」

と、シャルドが言う。

「はい！」

ナオの声は上ずっている。

館から飛び出たナオは駆け足でブオドに飛びつく。

「お帰りなさい。父様、母様——！」

「ああ」

「ただいま、ナオ」

馬車から降りたばかりで疲れきっていた二人は、ナオのその声だ  
けで笑顔になった。

おかえり

(ああ、かなわないな)

シャルドは素直にそう感じた。

疲れによる錆が落ちたように微笑む両親の顔を眺める。自分が決して愛されていない訳じゃない。

だが、自分ですらあつて間もない彼女を姉と意思つつあるのに、両親が彼女を愛さない訳ないだろう。

だから、彼女を恨むまい。死からの生還はむしろ喜ぶべきものだ。客観的に見てもナオの存在は、デューイン家だけでなく、それを取り巻く者達にも利益を与えることになるだろう。

だが、今は政治的な観点は置いて、家族としての幸せをかみ締めよう。

直の親に対する感情というものは、13年前から凍りついたままだった。甘えると言うことを知らずに育った。

今の直には、“直”と“ナオエリユーシア”との境界線が無く……ただブオドとリオにベッタリとしていた。

幾度と無く、ブオドが真面目な顔をしてから語りかけようとするも、その子犬のような顔をされると、頭を撫でることしか出来ない……その無限ループを幾度と無く繰り返した。

「そうだ、ナオ」

「はい、母様」

リオが助け舟を出す。

「貴女の服を仕立てないとね。測ってあげるわ」

先程まで無邪気に笑っていた顔が凍てつく。

「い、え、私は……」

我に返ったナオは何とかそれを防ごうとする。

「あら、そうはいかないわよ。貴女も令嬢なのよ。やっぱり、可愛い服を見立てないと」

半ば強引にリオはナオの手を引いて行く。

まずは、シャルドに状況を説明してあげて。

リオの目はそう語っていた。

疲れがどつと出る。

ブオドは腰掛けた椅子で、フウと息を抜く。

「お疲れ様でした、パパ」

「……パパっていうな。言っているのはナオだけだ……」

男にそんな呼ばれ方をしたくない、とブオドは義息子に対して軽く口を叩く。

「そのご様子だと、大層お疲れのご様子ですね」

「まったく、どいつもこいつもあの娘をなんだと思ってるんだ」

ブオドは上を仰ぎながらそう言う。

「各所が利権を求めてきましたか？」

「ああ、今までが実質教会が利益を得てきた分、あちこちから言われた」

ブオドは静かに怒りをあらわにする。握った拳が震えている。

「俺は……ただあの娘に幸せになって貰いたいだけなのに」

そう嘆く。

「10歳を超えたら学校に通い……友を作り、自分のやりたいことをゆっくりと見つけて欲しかった」

「そうは……行かなかったのですね」

ナイディールでは、子どもの教育は10歳から始まり、最長で25歳まで学園に通うことになる。

ナオがそうなれば15年もの間、ナオが……というより、リターンズとアーマジユエルが学園側に預けられることになる。

それは、教会と政局が許さなかった。

「あの娘は、激しい波に飲まれるかもしれない」

それだけではなく、デューイン家周辺の家督問題もそこに含まれる。

ブオドはあえてシャルドには言わなかったが、彼自身それは把握している。

「僕も協力しますよ。姉様が平穏幸せに暮らせるように」  
「そうか……」

ブオドは疲れきった顔で微笑んだ。

一方、リオに連れていかれたナオは……と言うと

「ツーーーーー!!」

それはもう声にならない悲鳴を上げるばかりであった。

ノックしてから入りましょう

ナオは、ブオドに書斎に呼ばれた。  
部屋の前まで来ていた。

(……ノックして入ればいいのか?)

もちろん、ただ入ればいいと言う訳ではないだろう。貴族には貴族の、女性には女性の、そして、子どもには子どもの入り方があるだろう。

直は両親に自分が中身が別人であると思わせたくないと感じていた。墓所でナオが生き返ったとき彼らの喜びようは本物であった。また、このナオエリユーシア自身だけではない、直としても再び両親というものに会えた時本当に涙が出るほど嬉しかったのだ。

失いたくなかった。

物事の始まりは……いつかの終わりを意味する。

一度は両親の終わりを体験したからこそ、直が持つ終わりへの恐怖。

その恐怖はナオの体を震わせた。  
ドアをノックすると、

「入りなさい」

そう優しい声ブオドが言った。

恐る恐る、ドアを両手で開ける。

(子どもっぽく、子どもっぽく……って言ってもなあ)

直が知る女の子と言えば、紅莉だけである。

天真爛漫で、天然ボケで……それでも、人を放っておけない。そんな彼女がいたからこそ今の自分がある。

(ええい！ ままよ)

なるようになれと、ドアを開ける。開口一番出てきた言葉は、

「失礼します……」

だった。

安っぽいその言葉は、まるで職員室に入るような学生そのものだろう。

いくらなんでもこれはない、とナオは落ち込む。

「フッフ」

「ん？」

見ればブオドが微笑していた。

「いや、すまん。やはり年相応だと思ってな」

どうやらブオドには今のナオの動作がきちんと少女のものに見えたらしく、ナオは安堵する。

「だが、それも言ってもらえないのだよ。……まあそこに掛けなさい」

ナオはチョコチョコと歩いて、椅子に腰かける。その動作がまたブオドの微笑を誘うが、一瞬で顔を引き締める。

「ナオ」



「はい、父様」

「今のお前には酷い話なのだが言っておかなくてはいけないことがある」

ため息を付いてブオドは話を始める。

## 宣告

ブオドは物悲しそうに話を始める。

「ナオお前自分の年を分かっているか？」

「えっ……と、4歳？」

精神年齢は17歳だが、ここはナオの年齢に合わせておく。

「ここからは難しい話になる」

娘がこの話に付いて来れるかブオドは不安になる。

「お前の年齢だが……戸籍と呼ばれる我が国での書類上は17歳と  
言うことになっている。何故かと言うならば、この国にはリターン  
ズ つまりお前のように一度死んで生き返ったものに対する決ま  
りが無いからなんだ」

すなわち、ナオエリユーシアは死んでいた期間も含めて17歳と  
いう扱いになる。

「当然、学校も一年相応、の所から編入することになる」  
「ふん」

意味は分かるが、直にはいまいち実感が無い。元は17歳なのだ  
から、そのように扱われても不条理は感じない。

この話をしたときブオドは自分の娘のあまりの落ち着きぶりに驚  
きを隠せなかった。理解してないのかと思えば、そうではなくきち  
んと分かっているようであった。

だが、ここまではあくまで前座である。ブオドが納得できないのはここから先である。

「……ナオ。ここから落ち着いて聞いてほしい。お前の編入試験は半年後になる。」

それは突然の宣告だった。

「もし……受からなかった場合は？」

ナオの目にはブオドが脅えているように見えた。

「国か、学園か、教会のいずれかが、私達の監督が行き届かなかったとして、お前の身柄を連れて行く」

不条理だ、とブオドは机にやつあたりをする。一度は彼らはアーマジュエルという巨大な力に翻弄された。それが二度も……しかも今度はリターンズというおまけというには金箔まで付いて幸せを奪おうとする。ブオドはこれ以上の理不尽があるか、と机に当たるのも無理は無かった。

「……やってやるうじゃねえか」

ふとナオの口からそんな言葉が一意図的、に、に出た。ブオドはビックリした顔をする。

「父様、私に13年分の勉強を教えてください」

直にはゆっくりと歩みよってくる巨大な足にそのまま踏み潰される、という気はない。

脱することが出来る、いや逆に踏みつぶすぐらいの気迫をブオドはナオから感じる。

「もちろんだ……私に出来ることはなんでもやる。ナオがそれを望むなら」

まずは優秀な家庭教師の選抜からだ、ブオドはナオの気迫に充てられ、昔の凜とした姿が戻ってきたような気がする。

「お願いします！」

自分達の家族を壊そうとする者達へのあらがいと、未知の知識、技術への興味、ナオの意欲を高めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0747y/>

---

Paraとらべら～

2011年12月25日23時53分発行